



推戴式でお言葉を賜る三笠宮殿下



終戦60周年(平成17年度)合同慰霊祭

合同慰霊祭を執り行いますので、皆様お誘い合せの上、できる限り大勢御参加下さいます。ようお願ひ致します。合同慰霊祭の概要は、下欄に掲示のとおりです。

(文責 圓藤)

当協議会は、終戦60年(平成17)を迎えるに当たり、慰霊諸団体の主力である戦友・遺族の老齢化が進み、近い将来慰霊活動ができなくなることを危惧した瀬島龍三氏が、慰霊諸団体の会長等に諮り、賛同する人達と共に平成17年7月7日に設立されました。初代名誉総裁に三笠宮崇仁親王殿下

終戦75年、令和2年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」のご案内



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第49号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0072 千代田区飯田橋1-5-7
東専堂ビル2階

電話: 03 (6380) 8943
FAX 03 (6380) 8952
<https://ireikyoku.com>
振替口座 00140-6-334930

編集人 圓藤 春 喜
発行人 國澤 輝 生
印刷所 島根印刷株式会社

目次

令和2年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」のご案内	1
あの戦争を振り返り戦没者の霊を慰める(第二回)	2
ガダルカナル島の戦い	8
(二) 川口支隊の戦闘	13
図書紹介「反日種族主義」	15
事務局からの報告等	

令和2年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭のご案内
当協議会は、当協議会参加団体と共に、令和2年度の「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を左記のとおり執り行う予定です。

- | | | |
|----------------|-------------|--------|
| 一 時期 | 令和2年7月4日(土) | 記 |
| 二 場所 | 靖国神社 | |
| 三 次第 | 式典・昇殿参拝 | 12時00分 |
| ① 式典 | 13時30分 | 拝殿・御本殿 |
| ② 参加費 | | 靖国会館 |
| ③ 式典・昇殿参拝(玉串料) | 2000円 | |
| ④ 直会 | 5000円 | |

なお、本年は新型コロナウイルス感染防止を考慮し、5月下旬頃細部実施要領を決定し、その後会員の皆様には、決定した実施要領のお知らせ及びご案内をさせていただきます。決定した実施要領会員以外の方は、当協議会事務局までお問い合わせ下さい。

〒102-0072
千代田区飯田橋1-5-7 東専堂ビル2階
(公財)大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会事務局
電話 03-6338-0189
FAX 03-6338-0189
Eメール bc05197@nifty.com

『あの戦争を振り返り戦没者の 霊を慰める』 第二回

東京裁判研究者
元くらしき作陽大学教授

松元 直歳

第二回 大東亜・太平洋戦争への前奏 曲(Ⅰ) 明治維新と日露戦争

正義、力。

正しい者に従うのは正しいこと
であり、最も強い者に従うのは必
然のことである。

力なき正義は無力であり、正義
なき力は圧制である。

力なき正義は反抗を蒙る。なぜ
なら、悪人はつねに絶えないから
である。正義なき力は弾劾される。

それゆえ、正義と力を一如たら
しめねばならない。そのためには、
正しき者をして強くあらしめるか、
強き者をして正しくあらしめるほ
かはない。

正義は、問答の種となりがちな
ものであるが、力は、判り易く、
問答無用である。それゆえ人は、
正義に力を与えることが出来なかつ
た。なぜなら、力は、正義に対抗
して、そちらが不正でありこちら

こそが正義である、と主張するからである。

かくして人は、正しき者をして
強くあらしめることが出来ず、強
き者をして正しいとしたのである。

パスカル『パンセ』英訳版Pens
es and Other Writings (Oxford
World's Classics) 135 (松元訳)

歴史の修正と本稿のターゲット

第一回稿で予報した第二回目の本稿
では、「あの戦争を振り返る」ために、
まえがきとして、「歴史修正の申立」
について記す。現代史に対するこの新
たな解釈は、米英を中心とする戦勝国
においてすら、近來とみに勢いを得て、
少なくとも「有力少数説」の地位を築
き始めたと観察してよい。

「歴史の修正」とは一体どのような
ことであろうか。一般には、「修正主
義史観」若しくは「歴史修正主義」と
いう言葉で主張され、また反対に論難
されたりすることが多いようである。
その点、疑問ともなる。が、筆者と
しては、これらの言葉の厳密で詳細な
定義に拘泥することは止めにする。唯、
様々な歴史上のテーマに関する所謂
「通説」若しくは「多数説」と対峙す
る様な、「反対説」若しくは「少数説」
で有力なものを、「歴史修正の申立」

として取り上げることとする。

第二回目の具体的なテーマは、「あ
の戦争」、即ち第二次世界大戦の嚆矢
となりその重要な一部を占めた「大東
亜・太平洋戦争への途」である。然る
にこのテーマについて「歴史修正」を
申し立てていると筆者が判断する見解
の表明者は、一部例外を除き、嘗ての
敵国であった英米に著しく多い。依つ
て主として、「近代史修正を申し立て
るアングロ・アメリカンの有力少数説」
という大まかな括りの中で報告する。

本稿及び次稿(第三回)においては、
「世界戦争時代への前奏曲」改め「大
東亜・太平洋戦争への前奏曲」につい
て、第一に「結果として歴史の修正を
申し立てている歴史修正有力少数説」
の中から、19人の著述者とその代表的
な著述作品を一覧表(別表)によつて
紹介する。「歴史修正有力少数説著作
選」と題する。

第二には、日本にとつての「大東亜・
太平洋戦争への前奏曲」を為す重要事
項として、紙面の都合上、ただ二つに
限定する。即ち、一つは「明治維新と
日露戦争」であり、他は「戦間期の日
米関係から開戦へ」である。本稿と
次稿に分けて取り上げる。前者につい
ては、J.F.C.フラーの『西方世界の決
定的戦闘及びその歴史に及ぼした影響』

第3巻『アメリカの南北戦争から第二
次世界大戦の終了まで』に、主として
依拠する。次に後者については、これ
に加えて、「アントワープ・マクマリー
著アーサー・ウォルドロン編著「平和
はいかに失われたか一大戦前の米中日
関係もう一つの選択」及びジョージ・
F・ケナン著『アメリカ外交50年』に
主として頼る。日清・日露の戦役から
大東亜・太平洋戦争の開始までを、こ
れらの所説に頼りながら振り返り、
「戦没者の慰霊」としたいと思う。

歴史修正有力少数説

近年、渡辺惣樹氏は、「歴史修正主
義史観」に立つて執筆行動を続けてい
る、と自ら明言して、2014(平成
26)年にハミルトン・フィッシュ『ルー
ズベルトの開戦責任』を、2017
(平成29)年にハーバート・フーバー著
ジョージ・H・ナッシュ編『裏切られ
た自由』を、そして2018(平成30)
年には、チャールズ・タンシル著「裏
口からの参戦」の邦語訳書を発刊され
た。自らも直接、日米関係史について、
執筆を続けておられる。

氏は、歴史修正主義史観を、「先の大戦時の枢軸国であった日本やドイツ
が正義の国であった」と主張するもの
ではなく、「日本やドイツが、仮に連



J. F. C. フラー

合国主張のように全体主義あるいは軍国主義の『悪い国』であつたとしても、英米はより賢明な外交が出来たのではないか」と考察する史観である、と論じておられる。

この様な立場に関連して筆者は、自らの立場を、以下の通り明かにしておきたい。即ち、第一には、何よりも事実と真実を第一義として追跡すること。第二には、全ての人間の、個人間、社会間、民族間、国家間には、道徳、道理、道義、論理、常識の如き、守るべき規範があり、これらに基づいて人間の営為の適否、正邪、是非を判断することを決して避けない、という事である一例え、山ほどの論議があろうとも、また具体的な場合においては柔軟に応答しなければならぬとしても、また必ずしも一義的に定義できないとしても、である。

それが中々に困難である事を象徴す

る実例を、一つのみ挙げておきたい。即ち、国家間の外交交渉について言うならば、各当事国の首魁なり担当者なりは自国利益のためには、虚言、二枚舌、その他どのような反道徳的、反理性的、非論理的若しくは非常識な言動を執つても構わない、とも主張され得よう。だが筆者の信条は、その様な立場を否定する。筆者の立場は、「関連した人々に関わる事実と真実を可能な限り追求し、これに対して可能な限り道理と論理に従つて価値判断を下す」というに在る。

帝国主義へと向かう戦争

フラーは、上記全3巻の「序論」を「帝国主義の台頭」と題し、カント、ホッブス、ソクラテスをも援用しつつ、次のように述べる。

文明において、戦争の根本原因は生物学的及び経済的なものであつた・・・戦争は絶えることがなかった。何故ならば、人間であれ家畜であれ、食うためには戦争を必要とし、「生活圏」は生存のための戦いの一つの大きな問題であり、今日に至るまでそうだからである。

エマニエル・カントは、『永遠の平和』で言う。

戦争は、結局は人類を結合する傾向がある。グループに纏まること、戦争の発生を減ずるからである。自然のゴールは和合であるが、自然の推進力は不和であるように見えるだろう。一つの部族が部族として存続しようと努め、部族間の戦争を経て多部族社会或いは多部族種族になるのである。同様に、一つの種族が、一つの閉鎖社会として存在しようと努め閉鎖社会間の戦争を経て、一つの民族国家となる。そして一つの民族国家が、民族国家として存在しようと努めて、国際的戦争を経て一つの帝国へと成長していく。

我々は「帝国」という言葉を、この様な意味で使えば十分であり、そこにマルクス主義的な特別の理屈を持つてくる必要はない。

明治の開国と維新

1879年に生まれ、1941年にアメリカに没したニューヨークの新聞人「エドメーション」は、30年間、神道を研究し、一神道家をもつて任じた。フランスの哲学者ベルグソンにも神道の真髓を説いたが、遺骨は「日本に葬れ」と遺言され、日米開戦後、多磨霊園に

葬られた。彼は、1933（昭和8）年、『神ながらの道』で、明治維新を次のように描写する。

西洋が外部から日本の門戸を開き、日本の創造力は再び解放された。

しかもこの（徳川の）平和時代は、日本人の勇敢な精神を衰退させはしなかった。

日本は、英国のエリザベス女王崩御の時以降、他国と戦を交えたことはなかったが、約300年後、最新軍備にまさる中国及びロシアを破ることが出来た。日本人はなお創造的活動の原動力を失つていなかった・・・

・・・日本人の創造的活動は、昔のように新知識・新成功を熱望すると同時に、日本民族古来の風習の多方面を保存しながら、中世思想の世界から現代的世界へと踊り出た。

他方、フラーは、この維新と開国を次のように描写する。（松元仮訳）

アメリカ人とプロシア人が各々の帝国の礎を築いている頃、日本は、その竹の帳（とばり）の陰から姿を現し、そしてほどなく、自

らなりの足取りで彼らの後を追いつ出した。

この激変に陥らせたものは、生物学上のものであり、産業上のものであった。日本は人口が過剰となり、国民を養うに足りる充分な米を生産出来ず、又同時に工業産品の過剰生産は、貿易の均衡を失わせしめた。この二つの事由が、海外膨張を要請した。即ち、過剰生産を吸収するための外国領土の獲得及び日本産品を吸収するための外国市場の獲得であった。

我が国の維新一近代化と産業化を簡潔に描写している。

産業革命後の禽獣社会

西方世界の力によって強いられた明治の開国により、世界地勢図の中に放り出された日本は、一民族国家として、閉鎖されてはいるが相応に開明的な社会として、当時の世界諸国の後塵を拝せぬ繁栄段階に達していたと言つてよい。ともあれそのような我々の社会が放り出されたのは、フラーによれば、以下の様な国際社会、世界地勢であった。

産業革命によって生存のための

経済闘争が生まれてきたが、この闘争では人々は、原始時代にかえつて、ジャングルの中で行われていた自己保存の法則を適用するようになった。原始時代の人間と野獣との戦いは、国家間の産業闘争に姿をかえた。この産業闘争では、各競争相手は全て、野獣の様に争つた。

このような野獣の国際社会に、先行列強に劣後して登場した民族国家は、その民族国家が活気にあふれた国家である場合には、自らの生存をかけてその生活圏を拡充しようとするであらう。それがドイツにとつての「生存圏」(Lebensraum)であつた。この言葉は、ヒトラーの発明になるものではない。元来、進化論的思潮を背景にもつものであり、1871年の統一以降、先行する英仏を念頭に植民地獲得のために用いられた、ドイツの政治的、国民的標語であつた。

維新日本においては、それは「文明開花」と「富国強兵」であり、その展開としての「大陸進出」であり、結果的目標としての「大東亜共栄圏」であつた、と言つてよからう。

我々は、「人間の生物的存在としての営為」として、生存(活)圏獲得、

産業・通商の活性化、植民、時に帝国主義、植民地主義、侵略と非難される海外活動を展開していったのである。フラーによれば、

人口は1868年の32百万人から1903年の45百万人に増大し、日本は19世紀が終る迄には、ヨーロッパが20世代をかけて成し遂げたものを、1世代で成就させ、14世紀欧州の封建制から20世紀の戸口を乗越え、充分に整備された産業国家、陸・海軍国家となつた。日本は然し、表面上西欧化された国家となつたが、その精神には武士道の記憶が生きていた。

対等な国際関係を！

富国強兵から対外進出へ

明治維新の諸変革は、フラーによれば、

治外法権条項を持つ押し付けられた通商条約によって国内に掻き立てられた、痛憤の情によつてのみ説明され得よう。もし白人が、その大砲に依拠してその様なことを遂行できるのならば、古より続いてきた、誇り高く聡明な日本人が、自らの大砲をもって何が出来ないことがあるのか？将来、砲火

の力によつて日本を救出しようとのヴィジョンが、日本維新の原動力であつた。

そしてその中で最も重要な改革は、1873年の国軍創設であつた。それまでは侍の特権であつた軍人という職業が、国民にまで拡大された。徴兵制が導入され、陸軍と艦隊が近代化され、陸軍にはフランスとドイツの方式が、海軍には英国の方式が採用された。

つまるところ、

この驚くべき変革は、その軍事力の強調と相俟つて、膨張へと導く運命にあり、不可避免的に、日本と支那の衝突及び衰退しつつあつた満州帝国(清)をハゲタカの様

に食い物にした、欧州諸国との間の軋轢を意味するものであつた。

「驚くべき変革」は、「国力の増大」を実現し、そしてキッシンジャーに従えば、「国力の増大を国際的影響力の増大に変えることを求めなかつた国はない」のである。

この様な国民的動力によつて、3次の朝鮮事件を経て日清戦争が戦われた。フラーによれば、

即ち第1次の日支戦争である。

日本軍は連戦連勝であった。9月15日、支那軍は、平城において野津將軍により潰走させられた。2日後、支那の艦隊は黄海海戦で、伊東提督によつて打ち負かされた。11月21日、大山元帥は旅順を強襲し、陥落させた。支那は和平を乞い、1895年4月17日、下関条約が調印された。



下関講和条約

日露開戦へ

日露開戦の経緯と事由について詳しく述べる間はない。簡単に記す。

第一は、極東ロシアの再膨張であった。1847年のカムチャツカ半島東端ペトロパヴロフスクの建設、1858年愛暉条約による黒竜江左岸71万5千方マイル領土の獲得、更に1860年には、太平天国の乱下の支那混乱状態

を利して、海岸線600マイルを持つ沿海州17万3千方マイルの割譲、直後のウラジオストクの建設があった。第二は、日清戦争後の下関条約に対するいわゆる「露独仏三国干渉」である。フラーによれば、「条約に調印したインクも乾くか乾かないうちに露独、仏が日本による支那の遼東半島割譲に反対した」、「日本は、これら諸国連合の圧力に抗し得るほどに強力ではなかったため、賠償金3千万両の支払いを受けて同半島の領有放棄に同意した」のであった。

しかも、「この（日本の）譲歩の直後、駐北京露公使は、・・・既に1891年、シベリア鉄道の建設を開始していたが・・・清の首相李鴻章と条約を締結し、1897年に露は遼東半島の租借権を支那から獲得し・・・ハルビンから旅順・大連に至る鉄道建設の許可を得た」のであった。

第三は、支那人による対外人蜂起である義和団事件の帰結が見逃せない。即ち、在北京11万国公使館防衛に目覚ましい活躍を見せた柴五郎で有名な「義和団事変が日英に与えた特別の影響」である。フラーによれば、「その第一は、日本が、ロシア人はその能率が低く、極東に大規模な軍事力を維持するのは困難であつて恐れるには足ら

ない」と認識した事であつた。第二の結論は、英国が、日本人の効率の高さに強い印象を受け、極東の平和保障のために1902年1月30日、その孤立政策を放棄して、日本との間に防衛同盟を締結したことであつた。

西洋史の転換点一日露戦争

フラーによれば「西方世界」から見たとき、1904-1905年の日露戦争は、

西洋史における一つの重大な転換点であつた。それは、アジアの強国と半西洋的強国との間の、一つの力比べであつたのみならず、何よりも、アジアにおける西洋の優越に対する挑戦であつたからである。

日本人とロシア人はどのように戦つたのであろうか。フラーは「云う。

武器の面では、両敵国はさほど異ならなかつた。しかし人間の面では大きな隔たりがあつた。日本側では、忠誠心、愛国心そして自己犠牲が、公民としての又軍人としての最高の美德と見なされていた。ロシア側ではそれは、未詳のものであつた。

ロシア満州軍司令官クロパトキンによれば、

敵戦力の物質的な面に関する我々の得た情報によれば、それが良好であるとはとても評し難かつた。道義の面については、我々は、見過ごしていなかつたのだとすれば、過少に評価していた・・・軍に対する国民の深い敬意と公に奉じる個人の意欲と誇り、隊伍の中に維持されている鉄の規律、そして侍の精神に寄せる国民的信条を我々は見逃していた。他方我々は、支那における日本の勝利の果実を我々が奪つた際に、彼らの中に生じた痛烈な屈辱の感情を全く重視しなかつた。



日本海海戦

フラーは、「日露戦争の革命的性格」について、「この戦争は、・・・世界情勢を再配置する (reoriented) ものであった」と、云う。

1904年2月5日、日本軍のラッパが戦争に向けて鳴り響き、同時に彼らは、東洋世界に遍く、起床ラッパを鳴り響かせた。ここにアジアは、その往古の眠りから覚め起きたのであった。

即ち日本の勝利は、「はらわたに食い込んでいた革命のヴィールスを刺激する事によって、ロシアを崩壊させ」、「ドイツを、東側面における脅威を取り除く事によってその西部国境に集中させ、もって欧州の勢力均衡を覆した。

この事が、英国に、勢力均衡再構築のために、その英国の傘の下での平和 (パックス・ブリタニカ) を支えていた孤立政策を放棄させ・・・た。ロシアの圧迫を知るフィンランド、トルコ等の国が快哉を叫んだのは勿論、「白人司令官ステッセルが黄色人種の司令官乃木の前に白旗を掲げた」事実、各国は洋の東西を問わず驚愕した。

列強植民地帝国に対しては、「有色人種に対する白人の優位に挑戦する事によってアジアとアフリカを覚醒させ、致命的な打撃を与えた」。



水師營の会見

ではアフリカとアジアは、どのように「往古の眠りから覚め起き」かけたのであろうか、フラーは記す。

影響は、アフリカにおいても同様に甚大なものであった。アフリカ大陸に40年以上も住んでいた英国人ダイシーは、次のように書いている。

「原住民部隊はいかに勇敢であろうともヨーロッパ人には打ち負かされることとなっているとの信念が、突如、全く不意に、ある事を知って、根底から揺り動かされた一即ち、東方においてヨーロッパ最大の軍事勢力であると考えられていたロシアが、勝利者たる日本によって次から次へとかり立てられた事、何処の国民かは解らぬ

が明らかにコーカサス人やキリスト教徒ではなく、ちっぽけで弱々しい国によって、ロシアの陸軍が敗走させられ、海軍が壊滅させられ、その要塞が攻略された事を、知って。アフリカの原住民は、日本については何も知らなかったと言って差し支えないであろう。しかし、全アフリカの町や村の中に、極東のロシア人侵略者が無名の非欧州人種によって子羊のごとく蹴散らされたことを、直接的にも間接的にも知らない住民がいたとは思われないのである。」

またインドへの影響については、次のように語る。

然しこの世界革命が最上級の形態をとつたのは、英帝国の力の中心インドにおいてであった。インド北部を「興奮の渦が通り過ぎて行つた」と、C. F. Andrews は、書いている。そして「人里離れた村においてさえも、夜に皆で集まってフツカを廻し飲みするときには、日本の勝利について話した・・・。西アジアで長期の勤務経験のあるトルコ領事は私に、内陸部でも何処でも最も無学な小作人がそのニュースに『ぞくぞくしている』

のを認めることが出来よう、と語った。アジアは、隅々まで心を動かされ、幾世紀かの眠りがついに破られたのである・・・。世界史の書物の中に、新たな1章が書かれたのであった・・・。」と。

何がヨーロッパ最強国家の一つにかくも深い傷を負わせることが出来たのかを発見すべく、インド人学生達は、日本の歴史を学び始めた。そして彼らは、日本人の愛国心、自己犠牲及び国民的統一に、その答えを見出した。そこに武器の力を超える奇跡的な力があつたのである・・・。

そして「F」のフラーは、日露戦争の世界に及ぼした影響を、

これら全ての出来事は、アジア最東端でのこの戦闘によって醸成されたのであったが、それは450年以上も前にヨーロッパの最東端で戦われた等しく重大な戦闘と同じであった。1905年の旅順港の陥落は、1453年のコンスタンティノープル陥落と同様に、まさしく歴史上数少ない真の大事件の一つに数えられるべきであろう

と、結論するのである。(続く)

別表 『歴史修正有力少数説』 著作選（一部）

番号	著者（邦語）	著名（邦語）	著書発行日時	内容	邦訳書 発行者
1	ジョン・フレデリック・チャールズ・フララー 著 海上自衛隊幹部学校組織内部訳	『西方世界の決定的戦闘及びその歴史に及ぼした影響』第3巻『アメリカの南北戦争から第二次世界対戦終了まで』	原著：1956（昭和31）年 邦訳：1972（昭和47）年	18世紀中葉～1945（昭和20）年の西側世界の決定的戦闘	海上自衛隊幹部学校
2	ジョン・アントワープ・マクマリー 原著 アーサー・ウォルドロン 編著 北岡伸一 監訳 衣川宏訳	『平和はいかに失われたかー大戦前の米中日関係もう一つの選択』	原著：1935（昭和10）年 編著：1992（平成4）年 編著邦訳：1997（平成9）年	1920～1930年代東アジアの国際情勢	原書房
3	ジョージ・フロスト・ケナン 著 近藤晋一・飯田藤次訳	『アメリカ外交50年』	原著：1951（昭和26）年 邦訳：1952（昭和27）年	19世紀最終期～第二次大戦以降の米外交及びソビエトの行動の源泉	岩波現代叢書
4	ジョン・トーランド 著 毎日新聞社訳	『大日本帝国の興亡』	原著：1971（昭和46）年 邦訳：1971（昭和46）年	太平洋戦争	毎日新聞社
5	ジョージ・モーゲンスターン 著 渡邊明訳	『真珠湾ー日米開戦の真相とルーズベルトの責任』	原著：1947（昭和22）年 邦訳：1999（平成11）年	日米開戦とルーズベルトの責任	錦正社
6	チャールズ・オースティン・ビーアド 著 米潤監訳 阿部直哉・丸茂恭子訳	『ルーズベルトの責任』又は『日米戦争はなぜ始まったか』若しくは『ルーズベルト大統領と1941年戦争の到来』	原著：1956（昭和31）年 邦訳：1972（昭和47）年	日米開戦とルーズベルトの責任	藤原書店
7	チャールズ・カラン・タンシル 著 渡辺惣樹訳	『裏口からの参戦ールーズベルト外交の正体 1933～1941』	邦訳：2018（平成30）年	日米開戦とルーズベルト外交	草思社
8	ロバート・アルフレッド・シオボールド 著 中野五郎訳	『真珠湾の審判』	原著：1954（昭和29）年 邦訳：1983（昭和58）年	真珠湾と日米開戦	講談社
9	ハミルトン・フィッシュ 著 渡辺惣樹訳	『ルーズベルトの開戦責任』	原著：1976（昭和51）年 邦訳：2014（平成26）年	ルーズベルトの開戦責任	草思社
10	ハーバート・フーバー 著 ジョージ・H・ナッシュ 編 渡辺惣樹訳	『裏切られた自由ーフーバー大統領が語る第二次世界大戦の隠された歴史とその後遺症』	邦訳：2017（平成29）年	1930（昭和5）年～1945年間のアメリカ外交	草思社
11	クリストファー・ガイ・ソーン 著 市川洋一訳	『太平洋戦争とは何だったのかー1941～45年の国家、社会、そして極東戦争』	原著：1985（昭和60）年 邦訳：2089（平成元）年	第二次世界大戦終結に至る欧米諸国とアジア諸国の関係史	草思社
12	アルバート・ユーディ・ウエデマイヤー 著 妹尾作太男訳	『第二次世界大戦に勝者なし』	原著：1958（昭和33）年 邦訳：1967（昭和42）年	「勝利の計画」作成将校の第二次世界大戦録（ウエデマイヤー回想録）	読売新聞社
13	ジョン・アール・ヘインズ&ハーヴェイク・クレア 著 中西輝政監訳 山添・佐々木・金訳	『ヴェノナ 解読されたソ連の暗号とスパイ活動』	邦訳：2019（平成31）年	解読された第二次世界大戦中のソ連の暗号とスパイ活動	日経研究所
14	ロバート・B・ステイネット 著 妹尾作太男監訳 荒井・丸田訳	『真珠湾の真実ールーズベルト欺瞞の日々』	原著：2000（平成12）年 邦訳：2001（平成13）年	真珠湾と日米開戦	文藝春秋社
15	ジョージ・アキタ&ブランドン・パーマー 著 塩谷紘訳	『日本の朝鮮統治を検証する 1910～1945』	原著：2015（平成27）年 邦訳：2013（平成25）年	日本の朝鮮統治の実証的検証	草思社
16	ウッドハウス 暎子 著	『北京燃ゆー義和団事変とモリソン』	成元（邦語）：1989（平成元）年	・義和団事変と豪州人モリソン ・マルクス・レーニン主義と中国文化の罪	東洋経済新報社
17	ラルフ・タウンゼント 著 田中秀雄・先田資紀智訳	『暗黒大陸 中国の真実』	原著：1933（昭和8）年 邦訳：2004（平成16）年	マルクス・レーニン主義と中国文化の罪	芙蓉書房出版
18	ルディ・カウスブルック 著 近藤紀子訳	『西欧の植民地喪失と日本ーオランダ領東インドの消滅と日本軍抑留所』	原著：1998（平成10）年 邦訳：1998（平成10）年	加害者を忘れて犠牲者の身分にしがみつく東インドのオランダ人他	草思社
19	マイケル・ドブズ 著 三浦元博訳	『ヤルタからヒロシマへ 終戦と冷戦の覇権争い』	原著：2012（平成24）年 邦訳：2013（平成25）年	アメリカの対ソ原爆外交	白水社

J・F・C・フララー 著『西方世界の決定的戦闘及びその歴史に及ぼした影響』 J・F・C・フララーは、1878（明治11）年（スターリン、廣田弘毅、松井岩根、吉田茂誕生の年）イングラントに生を受けた。王立士官学校を経て、ポーランド戦争に従軍、第一次世界大戦での参謀将校勤務後は、1926年に多くの論文を発表、その後研究活動に専念し、『戦争の機械化』、『全体主義戦争論』、『機甲戦』などを著した。フララーは1956年、上記書全3巻を発刊した。当該書は、1922（昭和47）年、海自幹部学校において訳出され、第三巻（VOLUME III：FROM THE AMERICAN CIVIL WAR TO THE END OF WORLD WAR II）が、『アメリカの南北戦争から第二次世界大戦の終了まで』である。

ガダルカナル島の戦い (二) 川口支隊の戦闘

岩田 司朗

1 第二次ソロモン海戦と船団輸送の挫折

8月7日ソロモン方面における戦闘が起こると、連合艦隊司令長官は直ちに、この方面に兵力を増派する処置を採った。

8月24日早朝から「ガ島」飛行場の攻防をめぐる連合艦隊、米空母艦隊は相互に航空戦を展開した。第2次ソロモン海戦である。

昼頃、空母龍驤に米軍攻撃隊が到達、爆弾や魚雷が命中し、艦橋が吹き飛び大火災が発生して龍驤は航行不能となり、午後6時沈没した。また、連合艦隊第2艦隊も航空機による攻撃を受け、水上機母艦「千歳」が損傷した。

一方、連合艦隊攻撃隊は、米艦隊空母「エンタープライズ」に対し爆撃を開始、爆弾を3発命中させたが撃沈には至らなかった。

25日午前、連合艦隊第2艦隊は「ガ島」から飛来した急降下爆撃機の攻撃を受け、1隻沈没、1隻中破の損害を受けた。

一方、一木支隊第2梯団(ぼすとん丸、大福丸)及び横五特(金龍丸)の輸送船団は、25日午前6時、前夜「ガ島」砲撃を実施した駆逐艦と会合、入泊隊形、揚陸時の警戒配備等に関して調整中、突如敵艦爆6機が来襲、急降下爆撃と銃撃を加えてきた。また別の敵機の一群は金龍丸を爆撃し、1弾が後部に命中して大火災を起こし、搭載弾薬が誘爆した。船団はやむなくショートランドに向かった。

連合艦隊は、これらの状況を承知し、輸送船での「ガ島」上陸は極めて困難であると考え、駆逐艦、哨戒艇等の高速艦艇による逐次連続輸送による方針に改めた。いわゆる「鼠上陸」と俗称される上陸方式である。

この方針は直ちに指令され、一木支隊第2梯団はショートランドで駆逐艦に移乗して、27日夜「ガ島」に上陸、また24日2隻の船団でトラックを出発した川口支隊も、ラバウルで艦艇に移乗して29日頃「ガ島」に上陸するよう手筈が定められた。

2 川口支隊のガ島進出 (一) 川口支隊の運用構想

歩兵第35旅団(歩兵第114連隊を欠き、旅団司令部と歩兵第124連隊からなり、従来川口支隊と呼称されて

いた。)は、先に英領ボルネオを攻略、作戦終了後比島に転用されて、4月上旬以来比島の戡定に任じていたが、5月18日の大命により、6月6日ダバオ到着時をもって第17軍司令官の隷下に入った。旅団長は川口清健少将である。



川口支隊長 川口清健少将

第17軍司令部は、戦機に投じて一木支隊を先遣することによって、「ガ島」飛行場の奪回は可能であると考えていたが、戦況上、当然「ガ島」奪回に引き続きツラギを攻略する必要性を認識していた。そこで一木支隊先遣の処置を終わると、歩兵第35旅団を「ガ島」に派遣して、「ガ島」及びツラギの奪回を確実にする作戦の準備を進めた。

百武中将は歩兵第35旅団長川口清健少将をラバウルに召致して8月19日12時、「川口支隊は、速やかに『ガ島』に上陸し、一木支隊並びに同島及びツラギ島付近に在る海軍陸戦隊を併せ指揮して、『ガ島』の敵を掃滅し飛行場を確保するとともにツラギ島及びその付近の島嶼を奪回すべし」旨の命令を

発令した。

(2) 川口支隊の「ガ島」輸送

川口支隊の「ガ島」への機動は、8月29日から逐次行われ、同日夜、歩兵第124連隊第1大隊主力(450名)及び一木支隊の一部(300名)、31日支隊主力(1,016名)がタシンボコ・タイボ岬に上陸した。

艦艇輸送における駆逐艦1隻の輸送力は、人員約150名、軍需品は約100tを基準とし、輸送し得る兵器は、搭載及び揚陸の技術上の制約を受けて、おおむね山砲以下の歩兵重火器に限られており、火力の骨幹である砲兵、弾薬及び糧秣等の輸送は、いきおい輸送船によることが絶対に必要であった。

9月7日までに輸送することができた主要兵器は、高射砲2門、野砲4門、連隊砲(山砲)6門、速射砲14門、糧秣は一木、川口両支隊の人員に応ずる約2週間分程度に過ぎなかった。

一方、歩兵第124連隊長岡大佐の指揮する舟艇機動部隊は、4日午前4時、セントジョージア島南岸に到着、同日夜、同島南端から出発した舟艇群は、5日朝、敵機の襲撃を受けながらカミンボ南西約4kmに達着、激しく射ちまくる米軍機の掃射の下で、将兵は胸まで水に浸りながら海岸にたどり着き、椰子林に駆け込んだ。

岡連隊長の乗艇は機械故障のため落伍、主力から離れて最寄海岸に達着、6日早朝、部隊はマルボボ南方約1kmのジャングル内に避難集結した。

及び迫撃第3大隊を第17軍戦闘序列に編入するよう大命を發した。

第2師団の南東方面への派遣は、

「ガ島」の奪回に充当するという考えに基づくものではなく、モレスビー作戦に充てる予定であり、ソロモン方面は海軍作戦の重点を先ずその方面に指向することにより、陸軍兵力は川口支隊及び所要に応じて青葉支隊を投入すれば、奪回作戦はおおむね可能であると見積もっていた。

3 大本営、軍司令部等の作戦指導

(1) 「ガ島」攻撃に関する情勢判断

連合艦隊主力の南太平洋（南東）方面域に対する大挙出撃は、わが海軍の主作戦がまさしく南太平洋方面に指向されていることを示すものであった。

(3) 陸海軍中央協定の改定

これに対して大本営陸軍部は著しく状況を異にしていた。連合軍の「ガ島」反攻に伴い、大本営陸軍部作戦課が改めて状況判断を行ったが、その結論は重慶攻略作戦断行の必要性を再確認したのみであり、8月25日、一木支隊の敗北が決定的となった後でも変化はなかった。すなわち南太平洋方面は、太平洋方面の戦略的守勢正面の単なる一翼であるに過ぎず、ソロモン群島及び東部ニューギニア方面における連合軍の反攻は、わが軍の反撃によって間もなく容易に喰い止められると胸算していた。

8月31日、第17軍司令官及び連合艦隊司令長官に対し「情勢に應ずる東部ニューギニア、ソロモン群島作戦に関する陸海軍中央協定」が発令された。

この修正協定では、「ガ島」の米軍地上兵力に関しては、8月13日第17軍から5,000〓6,000内外という報告が寄せられていたが、「ガ島」守備隊長の報告を基礎とした第8根拠地隊司令官の8月23日における報告の「推定2,000以上」とみていた。

この地上兵力の判定については、終始不確実と認めながらも、一木支隊先遣の当時から2,000〓3,000という過少評価が先入主となっており、その後一部の増援があったとしても、川口支隊以下6,000の兵力でこれを圧倒できると考えられていた。この

この地上兵力の判定については、終始不確実と認めながらも、一木支隊先遣の当時から2,000〓3,000という過少評価が先入主となっており、その後一部の増援があったとしても、川口支隊以下6,000の兵力でこれを圧倒できると考えられていた。この

ソロモン方面に対する状況判断の甘さが、当初の作戦方針を崩壊させていった。

(4) 彼我の航空勢力

ソロモン方面の戦局を左右するものは、いうまでもなく空海の作戦、なかなか航空作戦の帰趨にあったが、大本営陸海軍部はもとよりわが方の優勢を信じていた。

8月末頃における「ガ島」基地の米軍航空兵力は、小型30〓40機、これを支援する空母はサンタクルーズ諸島方面に1〓3隻の存在が推定されていた。

これに対して南太平洋方面の既存の基地航空部隊、新たに派遣される航空隊の兵力を合算すれば、9月中旬の川口支隊の攻撃開始頃には、戦闘機約100機、陸攻約60機の作戦参加が見込まれていた。

更に空母兵力を考慮すれば、連合艦隊航空兵力は、数的には優位を占め得ると見込まれていたが、ここに大きな誤算があった。滞空時間の問題である。

当時日本軍の使用し得る飛行場は、ラバウル（東及び西飛行場）、カビエンの三飛行場の外、ブカ島に一部の戦闘機隊の基地があるだけであった。

「ガ島」までの距離は、ブカ基地から約300マイル、ラバウル基地から約560マイルに及び、その結果、米

機が数時間上空に滞空できるのに対して、日本軍はわずか15分という短い時間であった。その不利が情報網の不備、天候の感作等という諸条件とが相乗的に作用して、中央の計画を根本的にぐらつかせることになった。

(5) 現地陸海軍協定

「ガ島」の米軍が既に1カ月にわたる飛行場付近に鋭意陣地構築していることから、その攻略には川口支隊の地上攻撃、海軍の航空攻撃及び艦砲射撃とが、計画的組織的に敵陣地に指向されることが必要であった。

しかし、当時のわが陸海軍では、艦砲で直接陸戦を支援し、陸海空三戦力を統合集中するという戦術思想はまだ成熟しておらず、第17軍司令部として川口支隊の攻撃に呼応して、航空及び艦砲の支援を組織化する努力はなされていなかった。川口支隊からの軍司令部への要求にも「艦砲射撃は行わず」という要望が付加されており、敵情に関する判断の甘さとわが陸軍の精強に対する過信があったとみられる。

また、「ガ島」の米軍陸上兵力に関して第17軍司令部は、戦車、野戦砲を含む約5,000と判断し、「ガ島」奪回の必成を期するための兵力として、川口支隊（青葉支隊1大隊を含む）の兵力では不十分ではないかという疑問

(2) 大本営陸軍部の作戦緊急処置

一木先遣隊の敗退、「ガ島」への兵力輸送の艦艇輸送方式への転換をうけて、大本営陸軍部作戦課は、29日第2師団、独立速射砲第2大隊の1中隊、

が生じ、幕僚による研究を命ずるとともに、川口支隊長あて兵力の過不足について照会したところ、9月6日、川口支隊長から「現兵力にて任務完遂の確信あり、ご安心を乞う。予定の如く12日攻撃を行う」という趣旨の返電があった。

4 川口支隊の攻撃準備

(1) 攻撃計画の示達

8月31日夜、川口支隊長はタイボ岬に上陸、5日ごろまでに既に上陸していた部隊、逐次上陸する部隊を掌握しつつ、6日午後、折畳舟に乗ってタシンボコを出発、午後10時頃テレに進出した。

折から、連日の降雨に見舞われて河川が氾濫し、部隊の前進、特に弾薬、糧秣の集積はなかなか予定通り進捗しなかった。

7日午後1時、川口支隊長は各隊長をテレに集合させ、飛行場付近敵陣地攻撃に関する計画を示達した。

支隊長の企画は、「主力をもって敵陣地を背後より攻撃し、敵を潰乱に導き之を殲滅せんとする」にあった。支隊長は先の一木支隊の攻撃失敗の教訓から、テナル川（東川）河口付近以東の地区からジャングル内に潜入迂回し、飛行場の南方から敵の背後を奇襲して、

一夜のうちに飛行場を奪回しようとするものであった。

攻撃部隊は、右翼隊、中央隊（右・左第一線、第二線）左翼隊、砲兵隊に区分され、「10日未明より南方ジャングル内の迂回を開始、13日16時夜襲開始、翌14日払暁までに全地を蹂躪する」方針のもと各隊の行動準備が示された。

9月12日頃の日出は0200、日没は1700であった。

なお、攻撃開始時期については、参謀次長からの督促電もあり、支隊長は8日、「攻撃実施を12日に繰上げ尚密林通過第1日の状況により更に1日繰上げる」とあるべく支隊主力は明9日朝より密林を迂回する「旨を回答した。

(2) 攻撃準備位置に向かう機動



支隊主力は、8日頃から攻撃準備位置への機動を開始した。各部隊の行動の概要は上図の通りである。

動にあたっては中央隊の各大隊を一縦隊に掌握して前進するように部署していたが、その実施においては各部隊各個の行動となり統制を欠いていた。

恐らく各大隊長も自己の所在を的確に把握することなく、ジャングル内を遮二無二前進したものであろう。川口少将の回想録に、「もっぱら磁石によって直南に前進した後、直角に西進して飛行場南側に到着する計画であったところ、磁針偏差のため南進が南西進となり、西進が北西進と変わり、支隊主力が一時海岸近くまで迷い出て、驚いて再び南に進路をとった」ことが述べられている。

一方、敵機の攻撃と悪天候のため、支隊と離れ、9月5日朝「ガ島」北西端に上陸した舟艇機動部隊は、川口支隊の総攻撃の左翼隊となり、11日午前、マタニカウ川西方6kmの地点で攻撃命令を下達した。



川口支隊は、12日2000、支隊の各隊は一斉に飛行場に向け前進を開始した。しかし各隊は正確な地図もなくジャングルを啓開しつつ手探り状態で進撃してきており、自隊の位置さえも確認していない部隊があった。各隊間の連絡も取れず、重火器はまだ攻撃準備位置に到着していない、敵情を偵察する暇もなく、敵陣地の確認もできていなかった。このように準備不十分のまま夜襲は開始されたのであった。

5 川口支隊の飛行場攻撃

(1) 12日の攻撃

川口支隊主力は、ジャングルを踏破して12日夕刻までに予定攻撃準備位置に到着した。右翼隊（熊大隊）、中央隊左第一線攻撃隊、中央隊右第一線攻撃隊、第二線攻撃部隊の順であった。

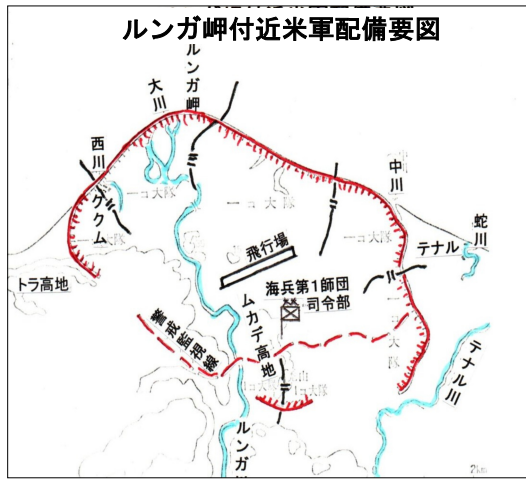
舟艇機動で「ガ島」に上陸、マルボコに集結した岡部隊は8日同地出発、東進してセギロウ川付近で海軍ガ島守備隊と合い情報を得た。

岡部隊は、10日から川口支隊長と無線連絡が可能となり、左翼隊（舞鶴大隊）となつてマタニカウ川右岸方面から飛行場方面の敵を攻撃するよう命令を受けた。岡部隊の指揮下に入った青葉支隊歩兵第4連隊第3大隊は11日カミンボに上陸、岡部隊を追及する予定であった。

12日2000、支隊の各隊は一斉に飛行場に向け前進を開始した。しかし各隊は正確な地図もなくジャングルを啓開しつつ手探り状態で進撃してきており、自隊の位置さえも確認していない部隊があった。各隊間の連絡も取れず、重火器はまだ攻撃準備位置に到着していない、敵情を偵察する暇もなく、敵陣地の確認もできていなかった。このように準備不十分のまま夜襲は開始されたのであった。

右翼隊は、攻撃前進したが敵と接触できず13日天明を迎えた。攻撃準備位置が東方に偏していたためであった。

中央隊右第一線攻撃隊は、2300頃敵陣地らしいものを突破したが、間もなく天明となり、猛烈な敵の集中砲



火を受けて停止した。中央隊左第一線攻撃隊は、暗夜のジャングルの中の前進が困難でRunaga川に沿って北進した。その途中、大隊長は部隊の混交を避けるためにRunaga川左岸に兵力を集結させたが、夜襲に間に合わず、攻撃を中止し、0230、攻撃準備位置に後退した。

第二線攻撃部隊は、2100ころ突撃準備位置に到着したが、夜暗と密林のため友軍部隊との連絡がとれず、な

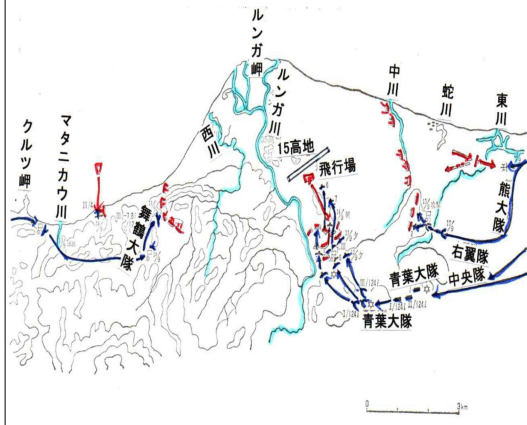
すすべもなく天明を迎えた。砲兵隊は予定どおり2000から射撃を開始した。

12日没後から、支隊司令部と各攻撃隊との連絡は絶えていた。支隊長は、ジャングルに行く手を妨げられ、その中を右往左往するうちに天明を迎えた。

このような各隊の状況から、支隊長は13日未明、中央各隊に対し、現在地付近に集結して隣接部隊と連絡を確保し、13日夜襲再興の準備を下令した。

左翼隊は出発が遅れ、ジャングル内の前進は進捗せず、目的地に到達する前に日出を迎えた。

川口支隊ガ島飛行場付近戦闘経過要図



(2) 13日の攻撃

13日天明以後、各攻撃隊は川口支隊長と連絡がとれた。支隊長は13日10

20、前日の計画に基づいて攻撃再興を下令した。

13日2000、各攻撃隊は夜襲を再開した。右翼隊は1700、中川上流8kmの地点を発進、途中小部隊の敵を撃破しつつ敵陣地に迫ったが突破できなかった。

中央隊右第一線攻撃隊は、大隊長が部隊を離れて行方不明となり、同隊は夜襲を実施しなかった。

中央隊左第一線攻撃隊は、Runaga川右岸に沿って前進し、敵第一線陣地を突破し、第二線陣地に迫ったがこれを抜くことができず、敵集中砲火により大隊長以下多数の死傷者を出した。天明以後占領地を確保できず後退した。

中央隊第二線攻撃隊は、激戦のすえ敵第一線及び第二線陣地を突破し、天明までに飛行場東方地区に進出した。同攻撃隊長は、14日天明とともに攻撃続行を企図したが、部下部隊の掌握は極めて困難であった。間もなく支隊長の攻撃中止の命令が伝達された。

左翼隊は14日未明マタニカウ川右岸の高地北端で会敵、敵陣地の一角を占領したが敵砲火により戦果を拡張できず、天明以後後退した。

川口支隊長は、中央隊の後方にあつて第一線の状況を承知し、攻撃失敗を確認した。携行糧秣は既に尽きようと

していた。タイボ岬付近出発時、将兵各人が1、2日分の糧秣を携行していたに過ぎず、元来9月13、14日以降は「糧は敵による」と胸算していたのである。

支隊長は14日午前11時、敵から一時離脱しRunaga川南西方地区に兵力を集結して、後図を策するという決心をした。そして第17軍司令部に対して、これまでの状況及び決心を打電した。

川口支隊の攻撃参加兵力は6、217名、損害は戦死633名、戦傷505名、行方不明75名、計1、213名であった。海軍ガ島守備隊は、一部が左翼隊に協力したほか攻撃には直接参加しなかった。

6 川口支隊の転進

川口支隊長はRunaga川上流左岸、アウステン山東側にあつて、糧秣も皆無となり飛行場攻撃再興が困難となつてきたので、支隊の兵力をマタニカウ川左岸地区に集結するよう決心を変更し15日午後7時「支隊は兵力集結地をマタニカウ川左岸地区に変更する」旨の命令を発し、各部隊にじ後の行動の準備を示した。

将兵は、負傷者を收容しつつ、飢餓と闘い、若芽や雑草を喰いつつ、陰阻なジャングル地帯を西進した。

川口少将は、その回想録で当時の模様を「糧食は各人概ね9月13、14日に喰い尽し、一粒の米もなく全員絶食の状態で5、6日行軍した。」

海岸には椰子の木があるから、この実を以て飢えを凌ぐことができるが、支隊退却においては山地で椰子がない。土人の家は奥地には一軒もなく、万古斧を入れたことのない人跡未踏の地であるため、食べるものはなにもない。・・・と述べている。

当時、撤退が遅れている砲兵隊、熊大隊等に対し、速やかにコカンボナに転身するよう命じたが、砲兵隊、熊大隊との連絡はとれず、その所在も不明であった。通信部隊の連日連夜の努力により、23日午前5時50分、無線により熊大隊と連絡することができた。同部隊は転進間進路を誤り、ルンガ川上流付近で糧食がないため、餓死の一手前であることがわかった。そこで歩兵第124連隊長は第5中隊を連絡に向かわせた結果、砲兵隊及び熊大隊の大部は、9月26日かろうじてマタニカウ川左岸地区に到着した。

7 青葉支隊主力等の増派

第17軍司令官は、川口支隊の攻撃が失敗に終わったことを知り、川口支隊長に対し「攻勢拠点の占領」、「敵情

搜索」等に関する所要の命令を下達した。また、併せて15日以降「ガ島」に上陸する歩兵第4連隊主力を基幹とする部隊を支隊長の指揮下に入れることを示した。

20日軍は、既にラバウルに到着していた青葉支隊長那須弓雄少将に対し「支隊長は速やかに『ガ島』に至り、川口支隊長よりその任務を継承し、川口支隊を指揮すべし」と命じた。

この命令に基づき、青葉支隊司令部は、支隊残部の兵力を率いて10月1日夜「ガ島」カミンボに上陸した。

また、軍司令官は、軍の指揮下に入った独立戦車第1中隊、野戦重砲兵第21大隊第2中隊、迫撃第3大隊に対し「速やかに『ガ島』に上陸し、川口支隊長の指揮に入るべき」を命じた。

8 マタニカウ川河口付近の戦闘

26日午前9時50分、航空機、海岸砲及び重火器の援護の下に、約300名の米軍が攻撃前進して来て、マタニカウ川を渡河しようとした。左岸を占領していた第9中隊はこれに反撃を加えて、約30分後に撃退した。

米軍は戦闘後も引き続いて間欠的な砲撃を実施していたが、27日夜が明けると再び前日と同じように航空機と砲兵の支援下に約100名が河口付近、

また10時40分頃約80名が第12中隊の陣地正面の一本橋東方から攻撃してきたが、日本軍の第一線はこれを撃退した。11時15分頃駆逐艦に支援された大発9隻が、クルツ岬に猛烈な艦砲射撃のあと、岬の西部に上陸、マタニカウ川付近にある日本軍の後方を遮断してしまつた。

岡連隊長は直ちに、クルツ岬の西方約2km付近で待機中の第2大隊主力に攻撃を命ずるとともに、一本橋右岸に陣地占領中の第12中隊に第2大隊を増援するよう命令した。

第2大隊主力は、この敵を北方から海岸南方の密林内に圧迫するよう攻撃して、これを密林内に逃走させた。

午後1時30分米軍は大発2隻で再度上陸を試みたが、日本軍の機関銃射撃のため反転した。

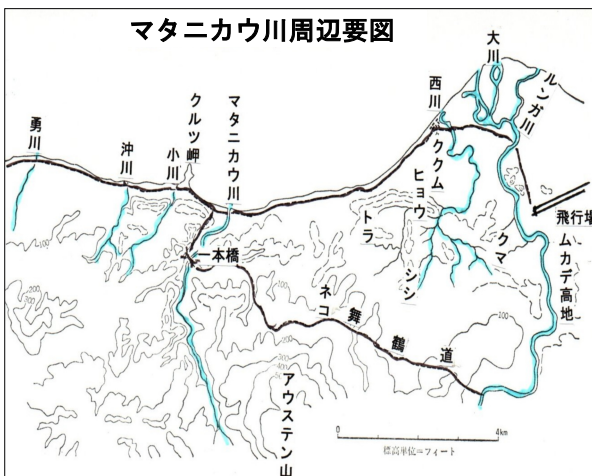
午後3時ころになると又々上陸点付近に艦砲射撃と航空機の銃爆撃を加えつつ大発7隻により約700名の米軍が上陸してきた。米軍は新上陸部隊と前回密林内に敗走した部隊とが呼応して攻撃を開始した。第2大隊長は当地域にいた第8中隊に「敵を海岸に撃滅する」ことを命じ、同中隊は果敢な白兵戦の後、米軍を撃破した。

第2大隊は27日夜、米軍の後退した海岸南側約1kmの高地に突入したが、米軍は既にマタニカウ川右岸に退却していたので、28日払暁までに所命地点に集結した。

このマタニカウ川付近の岡連隊の戦闘は、一木、川口支隊の攻撃失敗以来初めてみる順調な戦闘経過であった。

再三にわたる「速やかにマタニカウ川右岸を占領」の軍命令を受領した川口支隊長は、9月30日歩兵第124連隊に即時マタニカウ川右岸要地占領を命じ、岡連隊長は10月3日微弱な敵を駆逐して、歩兵1中隊に「マ」川一本橋東岸及び「マ」川河口右岸高地を占領させることに成功した。(続く)

マタニカウ川周辺要図



図書紹介

李栄薫編著

「反日種族主義」



本書は、元ソウル大学教授で現在李承晩学堂校長の李栄薫氏が、韓国の嘘の文化、政治、学問、裁判が行われている現状に亡国の危機感を抱き、警鐘を鳴らすために、考えを同じくする同志と共に出版したものです。

この本は、韓国で10万部以上、日本で40万分以上を売り上げるベストセラーとなっています。

以下主要内容について紹介します。

1 反日種族主義

韓国の民族主義は、西洋で勃興した民族主義と異なり、自由で独立的な個人という概念がない。韓国民族はそれ自体で一つの集団であり、一つの権威であり、一つの身分です。むしろ一つの種族といった方が適切です。

反日種族主義とは、隣国日本を永遠

の仇と捉える敵対感情であり、ありとあらゆる嘘が作られ広がるのはこのような集団心性に因るものです。

2 日帝による土地・食料の収奪

教科書では、土地の40%が収奪され、食料も収奪されたと教えているが、収奪された土地は無く、コメの生産も灌漑設備の改善、肥料の増産で2倍となり、日本に市場価格で輸出されている。

3 労務者の強制動員 強制労働 奴隷労働

教科書では、戦時中73万人が強制動員され、奴隷労働を強いられ、賃金も日本人と朝鮮人との間に大きな格差があったと教えているが、日本に労務動員された労働者の大半は、強制のない募集と官斡旋により高給を求めて自発的に日本に渡った者であり、強制の伴う徴用で日本に來た労働者は10万人程度に過ぎない。

多くの朝鮮人が投入された炭鉱は成果であり、日本人と朝鮮人の間に差は無かった。

「奴隷労働を強い

られた朝鮮人労働者」

として教科書に載っている写真は、日本人が撮影した「石炭を盗掘する貧しい日本人」の写真を盗用したものである。



4 韓日請求権協定

韓国では、請求権交渉において韓国が獲得した無償3億ドルは、35年間の日本の支配の代償としてはあまりにも少ない。日本はきちんと賠償・補償をしていないので、韓国はもっと請求する権利があると考えている人が多い。

しかしこの考えは間違っている。講和条約交渉において、韓国は日本から切り離された地域とされたため、戦勝国や植民地国のような賠償請求権は認められず、相互の財産の返還と債務の返済の交渉となった。

日本が韓国に残した財産は22億ドルあったが、米軍政が没収し、韓国政府に委譲した。これを考慮して交渉した結果、韓国が日本に請求できるのは最大7000万ドルに過ぎず、もともと韓国に請求できる財産などほとんどなかった。

この金額で交渉を終わらせることができない韓国の立場を考慮して、経済援助で埋め合わせ、無償3億ドル、有償2億ドルで合意に達した。

朴正熙政権は、屈辱売国交渉をしたのではなく、最善の合意をしている。

個人請求権については、「今後韓日両国とその国民はいかなる請求権も主張できない」と明白に規定しており、韓国政府もこの協定で個人請求権が消滅したことを何回も表明しており、協定解説書にも「完全かつ永久に消滅した」書かれている。

最近韓国大法院がこの合意に反し「徴用労働者の精神的被害」に対し、「日本企業に慰謝料を支払うよう命ずる判決」を下したので、賠償要求は今後も続くことが予想されるが、解決できる見通しはほとんどなく、韓日関係はますます悪化していくであろう。

韓国人は請求権協定で過去史が清算されたことを認めなければならない。これがグローバルスタンダードである。

5 独島（竹島）問題

日本政府は、1905年に独島が韓王朝の所屬でないことを確認し自国領土に編入している。講和条約交渉時李承晩はこの島を自国領土に組み入れるよう要請したが、米國務省は「独島が韓国の領土であったことを示す証拠はない」としてこの要求を拒否している。

6 親日派清算

今日の韓国では、親日派は公共の敵とされている。

この活動は、「反民族行為者を清算する」という目的で李承晩政権時にスタートしたが、反共の最前線にいる警察幹部を大量に処分する「わけにいかず中断した。

朴正熙大統領時代に、左派政治家が

政権に打撃を与えるため反日感情を煽り、これを親日派清算にすり替え、大韓民国の建国の功労者を親日派に格下げして、大韓民国の建設に問題があることにしようとした。

左派の盧武鉉政権が誕生してからは、法律まで制定し、より多くの人を親日派に選定し清算したが、この国に大きな被害を与えたのは日帝よりも北朝鮮であり、韓国人は親日派清算に向ける熱意をもって、親北派、従北派の清算に注力すべきである。

7 慰安婦問題

韓国人は、朝鮮王朝時代は性に清潔な社会であり、売春業は日本が持ち込んだ悪い風習とみなしている。

しかし、売春業は王朝時代から存在し、日帝の占領期、解放後を通じてずっと存在し繁盛してきたので戦後長い間問題化することは無かった。

1983年に、日本の古田清治が「私の戦争犯罪 朝鮮人強制連行」という本で、済州島において女工12人を慰安婦にするため部下と共に強制連行したと記したことから韓国人は衝撃を受け大きな問題となった。

調査の結果、このことは嘘と分かったが、1991年に金学順という女性が元慰安婦であったと名乗り出た時、朝鮮日報が慰安婦を挺身隊と誤報して

から強制連行説が強くなった。

挺対協は、日本政府が強制連行を否定すると、世論作りに乗り出し、これに吉見中央大学教授が加わり、1992年1月に日本の公文書に基づき「日本軍が慰安婦の募集と慰安所の運営に深く関与していた」ことを発表し、日本政府に謝罪と補償、調査を要求した。

日本政府は前向きに対応し、調査の結果、軍が慰安所の設置、経営、管理、慰安婦の移送に直接・間接に関与したことを認め、慰安婦達に謝罪するとともに企業と民間から募った募金で基金を設立し、慰安金を支給しようとしたが、挺対協が反対し、当初前向きであった韓国政府も反対に回ったため途中で中止を余儀なくされた。

また、吉見教授は「日本軍慰安婦は、行動の自由がなく、監禁された状況で、意図しない性交を強要されたまま、前借金と増していく利子に縛られ、お金を貯蓄する機会も無く、まさしく性奴隷であった」と慰安婦性奴隷説を主張したが、これは事実と異なっている。

日本軍慰安婦は高収入で、貯金も送金もでき、行動の自由もあり、解放後の民間慰安婦や韓国軍慰安婦よりも保護されていた。日本軍慰安婦を性奴隷というならこれらも性奴隷といふべきである。

その後、挺対協はこの問題の国際化を図り、国連、米国、欧州に働きかけ、米議会と欧州議会でのこの問題の早期解決を促す決議を採択させることに成功した。

一方、国内においては、ソウルの日本大使館前に「慰安婦少女像」を建立し、その後も各地に慰安婦像を建立すると共に、元慰安婦達に「この問題の早期解決を図ってこなかったのは憲法違反だ」と政府を提訴させた。

憲法裁判所が2011年に「政府の憲法違反」を認めたため、朴槿恵政権が動き、2015年末に安倍政権との間で慰安婦合意が成立し、慰安婦問題は永久的かつ不可逆的に解決したことを確認するとともに国際社会において本問題について互いに非難・批判することは控えると約束した。

朴政権は、日本政府が拠出した10億円で「和解・癒やし財団」を設立し慰安金を支給していたが、朴大統領弾劾成立で退陣した。

替わって登場した文在寅政権は、この合意は被害当事者の同意がなく間違つたものとして財団を解散し、合意を正式に廃棄し、再交渉も要求せず曖昧に無効化した。

このように、日本政府が何度も謝罪し、慰安金を支給し、問題を解決しようとしたが、



慰安婦合意

うとしたが、挺対協は日本が受け入れられない要求を出し入意を妨げてきた。日本を攻撃し続け、韓日関係を破綻寸前までもっていくこと、まさにこれが挺対協の活動目的であった。

8 反日種族主義の報い

文在寅大統領とその支持勢力は、たとえ共産化しようともかまわない。南北協定を通して統一国家を作らなければならぬと叫んでいる。

亡国の予感が拭えないのは、その原因を作っている反日種族主義の横暴に対し、この国の政治と知性があまりにも無気力なためです。

以上概要を書きましたが、この本は日韓問題を理解するうえで大変参考になるといいますので、一読をお薦めします。

(文責 圓藤)

事務局からの報告等

一 令和元年度第2回通常理事会開催

3月5日(木)、当協議会会議室において令和元年度第2回通常理事会を開催しました。

本会議では、事務局から提出された議案等について熱心な討議が行われ、事務局案はそれぞれ原案通り承認されました。

(一) 議案等

①第一号議案…令和2年度事業計画書等

②第二号議案…定款及び規定の改正について

③第三号議案…令和2年度の財産運用について

④第四号議案…令和元年度下半期職務執行状況について

⑤連絡事項及び懇談会
・次回理事会及び翌年度定時評議員会の概要

・理事の選任案について

(二) 出席者

理事12名中11名 監事1名が参加

二 慰霊祭等への参加状況

①2月14日、千鳥ヶ淵戦没者墓において行われた、硫黄島戦没者遺骨

収集団遺骨引渡式に國澤事務局長が参加しました。

②新型コロナウイルス感染拡大の影響で、その他の慰霊祭行事への参加は中止になりました。

三 硫黄島戦没者遺骨収集派遣参加

今年度第4回派遣(1月29日～2月14日)に、偕行社から2名が参加され、御遺骨の収集に献身されました。

高温多湿、劣悪な環境下での作業本当にお疲れ様でした。

今年度収容された11柱の御遺骨は、2月14日、千鳥ヶ淵戦没者墓において遺骨引渡式が行われ、厚生労働省に引き渡されました。

四 海外戦没者遺骨収集事業について

令和元年度ミャンマー戦没者遺骨収集派遣が2月29日～3月11日の間実施される予定でしたが、海外における遺骨収集方針を再検討することとなり、急遽中止になりました。

なお、新型コロナウイルス感染拡大のため、令和元年度のその他遺骨収集事業も全面的に中止となりました。

五 新入会員紹介 (敬称略)

(令和元年12月1日～2年3月15日)
【特別会員】

サスラボ株式会社

代表取締役 武井 則夫

【賛助会員】

庵本 真路 井上 裕之

居原田 健 井本 慎吾

逢坂 啓一 岡崎 貴宏

小西 喜洋 佐久間 充

笹口 悦民 佃 精剛

内藤 彰信 中村 賀津雄

服部 正一 柳澤 孝興

山下 巖

以上、特別会員1団体

賛助会員15名

「寄稿のお願い」

当協議会は、広報誌「慰霊」を、年3回(1月、4月、9月)に発行しています。各団体及び会員の皆様の積極的な寄稿をお願い申し上げます。

原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。関連の写真等がありましたら努めて添付をお願いいたします。

会費納入のお願い

当協議会の活動は、会員の皆様のお費・寄付金等の浄財で成り立っております。

令和2年度年会費納入用の払込取扱票を「慰霊」49号に同封しておりますので、会費納入にご協力をお願い申し上げます。

新規会員獲得への協力をお願い

当協議会は、民間有志会員の皆様からお寄せいただく貴重な会費収入を頼りに、戦没者慰霊の事業を運営しております。

この国の大東亜戦争戦没者慰霊事業の永続と充実を希う、多くの皆様の当協議会への入会を心からお待ち申し上げております。

既会員の皆様には、お知り合いの方の入会勧誘について、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

会員の区分と年会費は 次のとおりです。

一 賛助会員

(本会の趣旨に賛同する個人)
年会費 三〇〇〇円

二 賛助特別会員

(特別御芳志の賛助会員)
年会費 五〇〇〇円

三 正会員

(本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)
年会費 一〇〇〇〇円

四 特別会員

(本会の趣旨に賛同する企業・法人団体)
年会費 一口一〇〇〇〇円
(二口以上)

*振込先口座番号(郵便振替口座)

〇〇一四〇・六・三三三九三〇

協議会参加正会員団体の令和2年度慰霊行事予定 (情報入手分のみ)

(各正会員団体が主催又は参加する主要慰霊行事を掲載しています。)

年月日	時間	慰霊行事名	場所
〈公財〉大東曲戦争全戦没者慰霊団体協議会			
2・7・4	式典12時00分 直会13時30分	令和2年度大東曲戦争 全戦没者合同慰霊祭	靖国神社 靖国会館
〈公財〉海原会			
2・5・31	11時00分～12時00分	第53回予科練戦没者慰霊祭	陸自土浦駐屯地内
2・4・4	14時45分～16時00分	第36回靖国神社の桜の花の下で「同期の桜」を歌う会	靖国神社大村 益次郎像前
2・8・15	9時00分～10時00分	第46回全国戦没者慰霊大祭	靖国神社拝殿
2・8・15	10時30分～12時15分	第34回戦没者追悼国民集会	靖国神社境内
鹿児島県行会			
2・6・23	9時30分～11時30分	鹿児島県沖縄戦没者慰霊祭	鹿児島県護国神社
2・8・15	10時00分～11時00分	大東曲戦争戦没者慰霊祭	鹿児島県護国神社
3・3月	10時30分～11時30分	鹿児島県戦没者墓所慰霊祭	鹿児島県戦没者墓所
熊本県行会			
2・11・1	11時30分～13時30分	合同慰霊祭	熊本県護国神社
3・1・9	11時30分～13時30分	新年の集い	熊本県護国神社
群馬県行会			
2・8・15		群馬県戦没者追悼式	ALSOくぐまアリーナ
2・8月		みたま祭	群馬県護国神社
埼玉県行会			
2・6月	12時00分～12時30分	埼玉県護国神社正式参拝	埼玉県護国神社
2・8・15	11時30分	埼玉県護国神社みたま祭り	埼玉県護国神社
特定非営利活動法人JYM日本青年遺骨収集団			
3・3月	10時00分～15時00分	JYMA慰霊祭・活動報告会	靖国神社
全国ソロモン会			
2・10・25	12時00分～16時00分	ソロモン群島方面戦没者慰霊祭	靖国神社
全国メレヨン会			
2・4・5	11時00分～15時00分	第51回全国メレヨン島戦没者追悼慰霊祭	備後護国神社慰霊碑前
2・6・7	11時00分～13時00分	メレヨン島北海道出身戦没者追悼慰霊祭	札幌護国神社慰霊碑前
2・10・25	11時00分～14時00分	東京地区メレヨン会慰霊祭	千鳥ヶ淵戦没者墓苑
全ビルマ会			
31・11・3	10時00分～14時00分	全ビルマ方面戦没者慰霊祭	靖国神社
筑後地区行会			
2・5・8	10時30分～12時00分	久留米市戦没者慰霊祭	野中町忠霊塔広場
2・8・15	10時40分～12時30分	戦没者慰霊平和祈年祭	久留米市忠霊塔
3・2・22	11時00分～12時00分	爆弾二勇士慰霊祭	山川招魂社境内
〈公財〉千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会			
2・10・19	13時00分～14時30分	秋季慰霊祭	千鳥ヶ淵戦没者墓苑
東部ニューギニア戦友連合会			
2・4・5	10時00分	靖国神社永代神楽奏奉斎	靖国神社
〈公財〉特攻隊戦没者慰霊顕彰会			
2・9・22	14時00分～16時30分	第69回特攻平和観覧年次法要	世田谷山観音寺
3・3・27	11時00分～14時30分	第42回特攻隊全戦没者慰霊祭	靖国神社
ハワイ明治会			
2・8・15	9時00分	盆法要	ハワイマキキ日本海軍墓地
3・3・20	9時00分	招魂慰霊祭	ハワイマキキ日本海軍墓地
福岡県行会			
2・5・9		福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭	福岡県護国神社
2・10・25		福岡陸軍墓地慰霊祭	福岡陸軍墓地
姫路県行会			
2・8・10	10時00分～12時00分	戦没者追悼慰霊祭	名古屋山霊園陸軍墓地
2・8・15	10時00分～16時00分	英霊感謝祭	姫路護国神社
2・8・16	9時00分～12時00分	田中静太郎陸軍大将顕彰碑慰霊祭	たつの市龍野公園
宮崎県行会			
2・7・11	10時00分～12時00分	宮崎県出身戦没者慰霊祭	宮崎県護国神社
山口県行会			
2・11・12	14時00分～15時30分	山口県陸軍墓地慰霊祭	山口県陸軍墓地